

森のちやれんがニュース

2022 冬

Newsletter vol.30



第3回蔵出し展

くぼでらいつひこ
「久保寺逸彦文庫—アイヌ文学研究者による調査と資料を
ととして、時代をさぐる—」開催

アイヌ文学をはじめアイヌ文化研究に大きな足跡を遺した久保寺逸彦(1902-1971)。彼が研究のために収集した資料のほとんどは、現在、北海道博物館に収蔵されており、その数は約7,000件にのぼります。本展示会は、久保寺没後50年あまりを経たこと、そして2021年に著作集全4巻が完結したことを機会として、久保寺旧蔵資料の全貌を紹介しようと企画されたものです。

会場には、衣服や民具に加え、久保寺が研究に用いた書籍がずらりと並びました。写真や音声、映像などの視聴

覚資料も豊富です。今回の展示会は、これらの資料があつめられ、調査された時代にも焦点を当てており、資料の意義と意味を考える貴重な機会となりました。(学芸員 田中祐未)



久保寺が作成したアイヌ語語彙カード

CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
久保寺逸彦 最初の調査の記録
- ③ 総合展示の資料紹介・第2テーマ
アイヌの物語を聴く
- ④ 研究活動紹介
北海道の白亜紀の地質調査と年代測定
解説員 冬の活動報告
新しい稲わらが届きました！
- ⑥ トピックス
めざせ！学芸員
【コロナ禍3年目】の博物館実習
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
録音・録画・筆録資料の公開に向けて
- ⑧ 活動ダイアリー
2022年9月～11月の記録



収蔵資料紹介

久保寺逸彦 最初の調査の記録

遠藤 志保

アイヌ民族文化研究センター 研究主査

北海道博物館では、アイヌ文学・アイヌ文化研究者である久保寺逸彦(1902～1971)の旧蔵資料(久保寺逸彦文庫)を所蔵しています。

今回はそのなかから、今からおおよそ100年前の1922(大正11)年7～8月に、久保寺が初めて行ったアイヌ語・アイヌ文化調査に関する資料をご紹介します。

久保寺はもともとアイヌ語研究を志して大学に進学したわけではありませんでした。1922年6月、大学生だった久保寺は、卒業論文のテーマが決まらず、夏休みに北海道の実家に帰省する際に調査できるようなテーマはないか、同級生に相談します。そこで紹介してもらった教員が、アイヌ語学者の金田一京助でした。そして、相談を受けた金田一から「アイヌ語の単語の研究でもやったらどうか」と勧められ、久保寺は卒業論文のテーマをアイヌ語の語彙研究に定めたということです(「アイヌ研究の思い出(1)」、当館収蔵番号178776より)。

そして、その年の7月に帯広を訪ねた久保寺は、このころ帯広でアイヌの児童を対象とした小学校の教員をつとめていた吉田巖(1882～1963)の紹介で山村ハナ(ウレシパン)から聞き取りを行います。

吉田巖は、このときのことを自身の日記に、「二時久保寺逸彦君、アイヌ語研究に來校六時まで応接(中略)。山村ハナの宅へご案内す」(7月20日)、「久保寺逸彦氏山村へ六日もあるいて、予期の研究をなし得たることを挨拶に午前十二時來校。篤学の士なり」(7月25日)、「二時頃より久保寺逸彦君來る。／午后五時までその需めに応じて、アイヌ談をきかしてやる。且器物類を見せ、説明をする」(8月31日)と綴っています(『吉田巖日記 第十三(帯広叢書 第三十二巻)』帯広市教育委員会、平成3年)。

このときに行った調査結果をまとめたものとして、アイヌ語十勝方言の語彙集とアイヌ語による物語3編が、久保寺逸彦文庫に収められています。

語彙集は「Vocabulary of Ainu Language (Tokachi Province) Vol. I ～ III」(当館収蔵番号177282～177287)と表紙に書かれた、A5判の大学ノート3冊です。表紙を直訳すると「アイヌ語の語彙(十勝地方)」。語彙は、「日月、山川 四時等」「貴賤、父子、兄弟等」「支体死活ノ類」「家屋器財ノ類」「鳥獸蟲魚類」「草木ノ類」「算数」「形容詞、副詞／間投詞」「起居進退、談論、思索、五感／其ノ他動詞一般」と、大きく9つに分類されています。それぞれの分類ごとに日本語の見出しが五十音順に並べられ、それに対応するアイヌ語が、時には短文などの用例もあわせて記されています。

見出しは全部で約1,800項目(見出しのみでアイヌ語が書かれていない項目もあります)。道具の名称の項目のなかには簡単なイラストが添えられている場合もあり、たいへん見やすく・わかりやすくまとめられています。

このほかに、アイヌ語の物語3編も聞き取られています。久保寺はタイトルを「Oina」とのみ書いていますが、これは物語のジャンルのことで、アイヌ語十勝方言で「神謡」と呼ばれるジャンルの物語です。

いずれもアイヌ語のみで和訳はついていませんが、それぞれの物語について、手書きの原稿やタイプライターで浄書した原稿といった、複数の原



久保寺逸彦が調査したアイヌ語十勝方言の語彙をまとめたノート(当館収蔵番号177282)

稿が存在します。中にはところどころに和訳や解釈がメモされている原稿もありますが、3編とも主人公の正体がわからないなど、不明点も多くあり、整理の途上だったように見受けられます。

北海道博物館では、2023年1月15日(日)まで、第3回蔵出し展「久保寺逸彦文庫」として、久保寺逸彦が集積・整理した研究資料の全貌を紹介する展示会を開催しています。今回ご紹介したアイヌ語の語彙集も展示していますので、この機会に北海道博物館に足を運んでいただければ幸いです。



第3回蔵出し展「久保寺逸彦文庫」の会場の様子

総合展示の資料紹介・第2テーマ

アイヌの物語を聴く

奥田 統己

アイヌ民族文化研究センター 非常勤研究職員

総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」には「見て 聞いて アイヌ文化の世界」というコーナーがあります。そこでは、19世紀生まれの人から現在活躍中の若い人まで、さまざまな年代の人たちによるアイヌの歌、踊りそして物語の記録を視聴することができます。このコーナーについては昨年のちゃれんがニュースで「映像資料『踊り』より 鶴川に伝わる踊り『フッサヘロ』」と題して、当センターの甲地利恵研究主幹が紹介しています。今回は引き続き、アイヌ語の物語のうち「散文説話」と「神謡」と呼ばれるジャンルの語りを記録した映像資料のなかから、物語の語り手に注目していくつかをご紹介します。



散文説話は、メロディーを伴わず日常会話に近い口調で語られる物語で、多くはふつうの人間が主人公となり、自らの波瀾万丈の人生やそのなかで体験した不思議な出来事などを子孫に語り伝えるという内容です。

散文説話の語り手として映像に登場する上田トシさんは、当コーナーの紹介パネルにもあるとおり1912年に現在の平取町内に生まれ、永年農業の経営に携わってこられたかたです。私は1987年に初めてお目にかかりましたが、そのころは、ずっと農家が忙しかかったのでアイヌ語の物語はほとんど語ったことがないとおっしゃりながらも、いくつかの散文説話を語ってくださいました。その後先輩の語り手のところに冬のあいだ通って物語を教わるなど

してレパートリーを増やし、多くの若い語り手やアイヌ語アイヌ文学の研究者を育てました。当センターの大谷洋一研究職員も上田さんの教えを受けた研究者のひとりで、旧北海道立アイヌ民族文化研究センターの研究紀要にも、上田さんの語った物語がいくつか紹介されています。

神謡は、短く繰り返されるメロディーにのせて語られる物語で、アイヌ語でサハまたはサケヘなどと呼ばれる、物語ごとに決まっている繰り返しの文句を伴います。多くは動植物や自然現象などの神々が主人公となり、人間とのあいだで経験したできごとや神々の世界でのできごとなどを語ります。

当コーナーで紹介している神謡の映像資料のひとつは、1901年ごろに現在の新しいだか町内に生まれた織田ステノさんによるものです。織田さんは上田さんと同じく永年農業に従事し、70代になって農業経営の一線を退いてから、白老町のポロトコタン（当時）の事業に携わってアイヌ伝統文化の指導者として知られるようになり、また多くの研究者を教え育てました。

織田さんも農家のお仕事忙しいころは、家でアイヌ語の物語を語ったり神事をしたりしたことはなく、ポロトコタンでアイヌの伝統的な着物を着て工芸品を作ったり物語を語ったりしていることを知ったご家族も、最初は驚いたそうです。映像のなかではアイヌ語でイテセというごぎ編みの仕事をしながら神謡を語っていますが、イテセは小さいころにおばあさんから教わっていたものの、ごぎを編むのは近所の人に頼まれたり自分の家で使う敷物を



作るのが主な目的で、とくにごぎ編みをするときにあわせてアイヌ語の物語を語るといことはなかったようです。

上田さんにとっても織田さんにとっても、人前で物語を語ったり若手や研究者を教えたりする活動は人生の一部に過ぎず、お二人とも農家としてのお仕事をとおして先祖を敬い家族を養ってきました。「文化」とはそうした家族や社会のなかでの活動の総体を指しており、「アイヌ文化」もアイヌ語や伝統的な生活様式などとその発展だけに限定されるものではありません。こう考えると、「文化伝承」も、特定の分野での特定の人々の活動だけではなく、各時代を生きるすべての人が、上の世代や下の世代を意識しながら営んでいる、日々の活動全体だということになるでしょう。

こうした考えも踏まえ、このコーナーでは上田さんや織田さんを「アイヌ文化伝承者」ではなく「農業に従事した人」として紹介しています。

研究活動紹介

北海道の白亜紀の地質調査と年代測定

久保見幸

研究部自然研究グループ 学芸員



1995年、京都府生まれ。富山大学大学院修了。2021年より当館学芸員（担当は地学）。専門は、地質学および地質年代学。

はじめに

「白亜紀」は、約1億4,500万年前～6,600万年前にあたり、陸では恐竜が、海ではアンモナイトやモササウルスが生息し、多種多様でとてもダイナミックな時代でした。「白亜紀」という時代に興味を持ったのは、小学生の頃にハマった恐竜がきっかけでした。恐竜がいつ、どのような場所で生きていたのだろうか？と疑問に思ううちに、白亜紀の地質や年代学に魅力を持ち、研究をしたいと思うようになりました。それ以来、学生時代を通して、日本各地の白亜紀の砂岩や泥岩などの堆積岩の調査や年代測定に関する研究をしています。

さて、私の研究についてよく聞かれるのは、「ドリルなどの大きな機械で岩石を削ったりするのですか？」や「どうやって岩石の年代を測るのですか？」です。実際には、山の中を歩き

ながら、ハンマーなどを用いて岩石を砕いたりしながら調査します。今回は、北海道での白亜紀の地質調査や年代測定に関する研究について紹介いたします。

北海道の白亜紀の地層を探し求めて

白亜紀の堆積岩は、北海道のあらゆる場所に存在するわけではありません。例えば、北海道中軸部の稚内、小平、夕張、三笠、穂別や北海道東部の根室、厚岸です。この地域には、白亜紀からその後の古第三紀にかけて海で砂や泥が堆積してできた「蝦夷層群」や「根室層群」と呼ばれる地層が分布し、数多くのアンモナイトや二枚貝(イノセラムス)化石が発見されています(図1)。近年では、むかわ町の「カムイサウルス・ジャポニクス」といった恐竜化石が発見され、北海道は「化石の宝庫」として非常に注目されています。

私は、このような化石が含まれる白亜紀の地層を対象に地質調査をしています。地質調査では、地形図を頼りにしながら、地層が露出している場所(露頭)を探します。その後、探し出した地層を地形図に記録し、どのような岩石からできているのかを調べていきます(図2)。地質調査では、図3のような道具を主に使用します。岩石がどのような鉱物から成り立っているのかを調べるときは、ハンマーを用いて岩石を砕いた後、ルーペで観察し、その岩石の種類を判定します。また、地層面の向き(走向)や傾きを調べるときには、クリノメーターという器具を用いて測定します。このような作業から得られた結果を地形図に記録し、「ルートマップ」や「地質図」を作成します。また、岩石を薄く磨いたもの(薄片)の作成や年代測定用の岩石試料も採取します。

また、地質調査の一環として、地層の剥ぎ取り標本も作製しています。地層の剥ぎ取り標本は、現場で露出する状態に近い形で地層を室内で観察することができるため、調査研究以外にも展示など様々な活用ができます。そこで、10月下旬、十勝郡浦幌町にて白亜紀－古第三紀 (K/Pg) 境界を含む地層周辺の調査および剥ぎ取り標本の作製を試みました (図4)。白亜紀－古第三紀境界 (約6,600万年前) を含む地層 (図5) は、恐竜やアンモナイトが絶滅

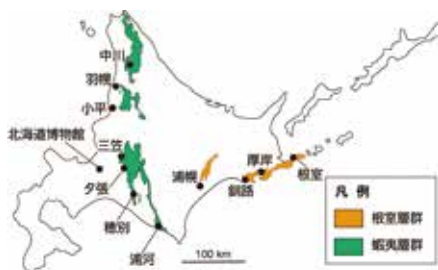


図1 北海道の白亜紀の地層の分布



図2 北海道での地質調査の様子



図3 地質調査で使う主な道具

した時期の貴重な地質学的記録を残しており、東アジアでも唯一、北海道の浦幌町に存在します。地層の剥ぎ取り標本の作製を行うのは、当館に着任してから初めてでしたので、非常に難しかったですが、当館調査メンバー、浦幌町立博物館の持田 誠学芸員、および足寄動物化石博物館の澤村 寛特任学芸員と協力し、K/Pg境界層が綺麗に見える標本を剥ぎ取ることができました(図6・7)。今後、教育普及や展示などで活用できるように、研究を重ねていきたいと思っています。

恐竜やアンモナイトが生きていた年代を調べる

アンモナイトや二枚貝の化石からは地層の年代を推定でき、非常に重要ですが、具体的な年代を数字で知ることはできません。近年の科学技術の発達により、様々な岩石中に含まれるジル

コンという鉱物を分析することで、化石が産出する岩石の形成年代を知ることができました。調査で採取した岩石を粉々に砕いた後、ジルコンとその他の鉱物を分離するパンニングや重液分離という作業を行い、色々な鉱物の中からジルコンを一粒ずつ選別します。そ

の後、レーザーアブレーション誘導結合プラズマ質量分析装置という特殊な機械を用いて、ジルコンに微量に含まれる元素のウランと鉛の同位体比を局所的に分析することで、岩石の形成年代を推定できます。例えば、北海道の三笠市に分布する蝦夷層群三笠層の砂岩に含まれるジルコンの年代を測定した結果、約9,500～9,000万年前を示し



図8 三笠層の砂岩から分離したジルコン粒子
○ 約9,500～9,000万年前のジルコン

ました(図8)。このことから、三笠層から産出するアンモナイトは、約9,500～9,000万年前(セノマニアン～チューロニアン)に生息したことが分かります。現在、当館が収蔵するアンモナイトや他の研究も含めて、蝦夷層群の年代を検討しており、今後、研究結果を公表したいと思っています。

おわりに

今回は、私の白亜紀の地質に関する研究の一端についてご紹介いたしました。北海道の「白亜紀」について分からないことはまだまだあります。少しでも詳細に明らかにできるように、これからもさらに研究を重ね、展示などを通して、「白亜紀」の色々な魅力をお伝えしていけるよう努力してまいりたいと思います。



図4 浦幌町茂川流布川でのK/Pg境界層の調査風景



図5 K/Pg境界(白い点線)の地層
(ハンマーの大きさは約28cm)



図6 K/Pg境界層を剥ぎ取る様子



図7 K/Pg境界層の剥ぎ取り
(スケールの大きさは60cm)

解説員 冬の活動報告

新しい稲わらが届きました！

越田 雅子

解説員

こんにちは！ 毎年わかってはいても、寒い寒いと口に出さずにはられない。そんな季節を迎えています、皆様お元気でお過ごしでしょうか？

今回は、当館のワークショップや、はっけん広場の活動になくはならない素材「稲わら」のお話です。

例年秋の稲刈りシーズンには岩見沢の農業試験場に伺って、今となつては貴重な手刈りの稲わらを分けていただいています。昨年10月に到着した新わらも長くて立派なものでした。

1年間利用するので4つの大きな段ボール箱に分けて収納、外の倉庫に保管するため虫などが入らぬよう厳重に目張りもします。

毎回使用する分だけ取り出すようにしているので、真冬は雪の中倉庫に向かうのが大変です。

私たちは稲わらで来館者の体験用や学校授業の貸出に使うわらぞうり、深ぐつなどの履物を制作しています。

例年行っていた「しめ縄作り」も大好評のイベントでしたが、残念ながら

はっけん広場閉室中の今年度も開催を見送ることとなってしまいました。

今回新しく届いたわらは早速「子どもワークショップ」で巨大なあやとり

の縄になって皆さんを楽しませました。新型コロナウイルスが早く終息を迎えますように、そして今年こそいたいた稲わらを十分に活用できるような新しい企画をどんどん考えていきたいと思っています。



立派な新わら



目張りしてラベルをつけて保管します



解説員手作りです

トピックス

めざせ！学芸員【コロナ禍3年目】の博物館実習

8月16日から26日までの10日間、道内外の大学から16名、コロナ禍3年目の博物館実習生を受け入れました。

初日は、館長講話後、収蔵庫・総合展示・特別展示を見学。各自の視点で見た総合展示について発表。

2日目、資料保存・情報・建築・図書など博物館を支える仕事について、収蔵環境や情報の問題を議論。

3日目、自然観察会のプログラムを作り、模擬観察会の形で発表。

4日目、文書資料の受入整理を行い、古文書なども読んで記録。

5日目、午前は野外博物館「開拓の村」の運営やボランティア活動について学び、午後は展示制作の議論。

6日目、アイヌ民族の伝統的衣服の取り扱いを学び、写真を撮影。また、アイヌ語地名の解説パネル文を作成。

7日目、明治から5代続いた明珍鉄工所の道具「型板」を整理。板に書かれた文字を読み取ってデータを入力。

8～10日目は、各班がケース1個とパネル1枚で、展示の制作。特別展にちなみ「虫」に関するテーマを設定。

学生が選んだタイトルは、A班「は

ちみつ物語」、B班「植物をつかったむかしの虫対策」、C班「栗山町のシンボル オオムラサキ」、D班「あなたの知らないハッカの世界」。実習内容をふまえて、見せ方の工夫など活発な意見交換を経て完成。職員も参加して講評会。総合展示場1階へ移動、特別展の開期に合わせ9月25日まで公開。

最終日には、学生から「コロナ下で交流が制限される中、貴重な体験ができました」と感想が聞かれました。

(総務部企画グループ 学芸主査 山際秀紀)



写真1 自然観察会の企画と発表



写真2 アイヌの衣装の取扱い



写真3 展示の企画・制作・発表

アイヌ民族文化研究センターだより

録音・録画・筆録資料の公開に向けて

博物館が保有する資料は、改めて言うまでもなく、道民の共有財産です。ふだん展示室に出している資料はそのごく一部で、ほとんどは収蔵庫で保管していますが、それらの資料についても、「この資料をじっくり見て学びたい」といった希望があれば、閲覧していただけることが基本です。これは、博物館にとって大事な原則の一つなのです。

ただ、この原則を一部制約せざるを得ない場合が、いくつかあります。資料がたいへん傷んでいるため現物を閲覧していただくことができない、といった事例はその一つです（資料のデジタル化を進めて、傷んでしまった資料でもデジタルデータを閲覧できるようにしていこう、というのは、この制約を少しでも回復させるための取り組みでもあります。）

* * * * *

資料の中に、個人情報やプライバシーが含まれるもの、写真などの場合では肖像権に対する配慮が必要なものの、原稿やノートなどで公表権に配慮する必要があるもの……といったケースについても、慎重な配慮に基づく適切な措置が必要です。

そのような資料は、さまざまなテーマや内容についてあり得るものですが、アイヌ民族の歴史や文化においても、伝承者や体験者からの聞き取り等によって記録された資料や、録画、写真など（これらをまとめて「採録資料」と呼んでいます）は、調査研究や文化伝承などにとってとても大切なものであると同時に、だからこそ、語り手やそのゆかりの方々らの個人情報やプライバシー、肖像権や著作権などについての慎重な配慮が欠かせません。

博物館などの公的な機関が保有する資料は、基本は皆に使っていただくためにあるものですが、同時に、語り手などの方々の権利を損なうことがあつ

てはならない——このことを適切に両立させるために、当館アイヌ民族文化研究センターでは、次のような考え方・進め方で資料の整理に当たっています。

* * * * *

まず、新たに資料を受け入れたときや整理作業に当たる際に、こうした配慮が必要な可能性のあるものの有無を確認します。

その上で、慎重な取り扱いが必要と判断した資料については、担当する職員が資料の内容点検を進めます。

そして、できるだけ、語り手や書き手など資料の関係者（ご本人が物故されている場合はそのご遺族）にこれらの資料のことをお知らせし、公開して差し支えない範囲や、公開にあたっての条件などを協議させていただくようにしています。

こうした整理作業を通して、公開できる資料とその範囲を判断しています。録音、録画資料や筆録資料の場合は「この資料の中のこの部分は公開すべきではない。しかしそれ以外の部分は公開して差し支えない」という整理結果になるものも多く、その場合は、資料の公開版を作成する際に非公開箇所を削除する等の編集を行うことにしています。

語り手やそのご遺族との協議は、ときに長い時間を要することもあり、協議の相手方となる方々にも少なからぬお手数をおかけすることになるのですが、このような協議をしっかりと行うことで、資料を適切に公開できると考えています。

* * * * *

こうして公開までの準備を終えた資料について、順次、公開用のデジタル複製を作成していきます。録音資料や録画資料の場合CDまたはDVDで、筆録資料や写真資料についてはデジタル画像データからの紙焼きなどで作成

しています。いずれも、当館図書室で閲覧・視聴していただくことができます。

2022（令和4）年12月現在で、録音・録画資料のCDやDVDは約400点、文書資料をプリントアウトした冊子は約100冊に達したところで、これからも整理と公開を進めて参ります。様々な学習や地域の文化、先人たちの足跡などを知る手がかりとして、活用いただければ嬉しく思います。

（アイヌ民族文化研究センター長
小川正人）



写真1 録音資料の公開版CD
ここに例示したのはアイヌ文学研究者・久保寺逸彦による録音資料の公開版です。
図書室の書庫で保管しています。



写真2 文書資料の公開版（デジタル画像データからのプリントアウト）
ここに例示したのは、アイヌ語地名研究者・山田秀三による地名調査の記録ファイルの公開版です。
現在は図書室の閲覧室に配架しています。

活動ダイアリー

2022年9月～2022年11月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

9月3日(土)

■第12回アイヌ文化巡回展(釧路町公民館)開催。

9月10日(土)

■チャレンが古文書クラブ⑦を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

9月14日(水)

■北海道博物館協議会を開催。

9月17日(土)

■第13回アイヌ文化巡回展、だて歴史文化ミュージアム特別展「アイヌ語地名を歩く～山田秀三の地名研究から～」(だて歴史文化ミュージアム)開幕。11月27日まで開催。

9月18日(日)

■子どもワークショップ「糸電話・風船電話で、もしもし コンニチハ」を開催。担当：会田理人。

9月24日(土)

■自然観察会「木の実・草の実の不思議をさがそう」を開催。担当：水島末記・堀繁久・表溪太、自然ふれあい交流館スタッフ。

9月25日(日)

■ミュージアムカレッジ「『民族音楽学』入門」を開催。担当：甲地利恵。



■第8回特別展「世界の昆虫」開幕。

9月30日(金)

■総合展示室クローズアップ展示2・4・5テーマを展示入替。

④「アイヌ無形文化伝承保存会 その設立と歩み」

⑥「たくぎん(北海道拓殖銀行)」(写真1)

⑦「リンゴはなぜ赤い? 草や木の実の不思議な世界」



■森のチャレンがニュース2022秋号(Vol.29)を刊行。

10月1日(土)

■チャレンが古文書クラブ⑧を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

10月5日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：亀丸由紀子。

10月14日(金)

■総合展示室クローズアップ展示1テーマを展示入替。

①「『蝦夷風俗十二ヶ月屏風』を読む(左隻：7～12月)」(写真2)

②「木戸竹石の『鮭漁図屏風』」(写真3)

10月16日(日)

■子どもワークショップ「親子で探検! 森のコレクションをつくろう」開催。担当：鈴木あすみ・表溪太・久保見幸・櫻井万里子。



10月22日(土)

■チャレンが古文書クラブ⑨を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

10月26日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：田中祐未。

10月28日(金)

■第3回蔵出し展「久保寺逸彦文庫」報道向け展示説明会を開催。



10月29日(土)

■第3回蔵出し展「久保寺逸彦文庫—アイヌ文学研究者による調査と資料をとおして、時代をさぐる—」を開催。2023年1月15日(日)まで開催。[1～2ページ参照]

10月30日(日)

■特別イベント「アイヌ音楽ライブ マレウレウコンサート」を開催。演者：MAREWREW(マレウレウ)(写真4)。

11月6日(日)

■「久保寺逸彦文庫を見る・読む・聞く①：久保寺逸彦 人と学問/久保寺逸彦回想談を聞く」を開催。担当：佐々木利和・大谷洋一(写真5)。

11月12日(土)

■チャレンが古文書クラブ⑩を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

11月20日(日)

■ミュージアムカレッジ「インターネットを使ったアイヌ語学習」を開催。担当：吉川佳見。

11月26日(日)

■子どもワークショップ「稲わらで縄をつくって、巨大人間あやとりに挑戦!」を開催。担当：舟山直治・表溪太(写真6)。

11月27日(日)

■「久保寺逸彦文庫を見る・読む・聞く②：1935年北海道・サハリン調査とその時代」を開催。担当：小川正人。

11月30日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：舟山直治。



来館者数

○2022年9月～2022年11月

総合展示室 42,959人 特別展示室 24,870人 はっけん広場 0人

○累計(2015年4月～2022年11月)

総合展示室 706,847人 特別展示室 505,905人 はっけん広場 120,784人

森のチャレンがニュース 第30号

発行日：2023年1月5日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2023